「はぁーっ……」

空が妖怪の山に受け入れられた翌日、文は作業部屋兼寝室の作業机に突っ伏していた。妖怪の山の上下関係はかなり厳しい。上司の命令は絶対で、部下は従わざるを得ない。その厳しさは外の世界とは比べ物にならないほどである。まして、現在の山のトップである天魔の命令となれば従わないわけにはいかない。もし万が一無視でもすれば、命は無いだろう。そういうこともあり、文はせっかく手に入れた『地底』という最高のネタを捨てなければならなかった。

「またネタを探さないといけませんね……」

文は深くため息をついた。しかし、このまま落ち込んでいても無駄に時間が過ぎるだけだ。何よりじっとしているのは文の性に合わなかった。文はとりあえず守矢神社に取材に出かけようと、立ち上がった。

「あぁ、そうだ。せっかくだからお空さんを連れて行こうかしら」

文はこの機会に、空に地上の案内をしてあげようと思った。少しでも空の寂しさや不安感が紛れればと考えたのだ。

文が空に声をかけようと部屋を出ると、空は居間で文の新聞を読んでいた。その顔は真剣そのもので、目はキラキラ輝いていた。それを見て文は思わず笑顔になった。幻想郷中を飛び回り、人や妖怪に関わらず新聞を押し付けているが、皆真剣に読んではくれていないことが事実だっただからこそ、空がこうやって読んでくれていることに胸が熱くなったのだ。

「お空さん」

「うにゅ？」
「今から取材に行くんですが、お空さんも来ますか？」
「しゅざい？」
「はい。取材っていうのは実際に人の話を聞いて文章にするための材料を集めることです。新聞を作る上でとても重要なことなんですよ。どうします？」
「私も行く！」
空は元気いっぱいに返事をして、勢いよく立ち上がった。
「わかりました。それじゃあ、外出の準備をしてください」
「私はいつでも行けるよ！　それでどこに行くの？」
「少し寄り道した後に、山に最近できた神社に行きます」
「うん、わかった！」

空は文の後ろに続くようにして空高く飛び上がると、感嘆の息を漏らした。
（綺麗だなぁ）